

国内の畜産物の需給動向

牛肉

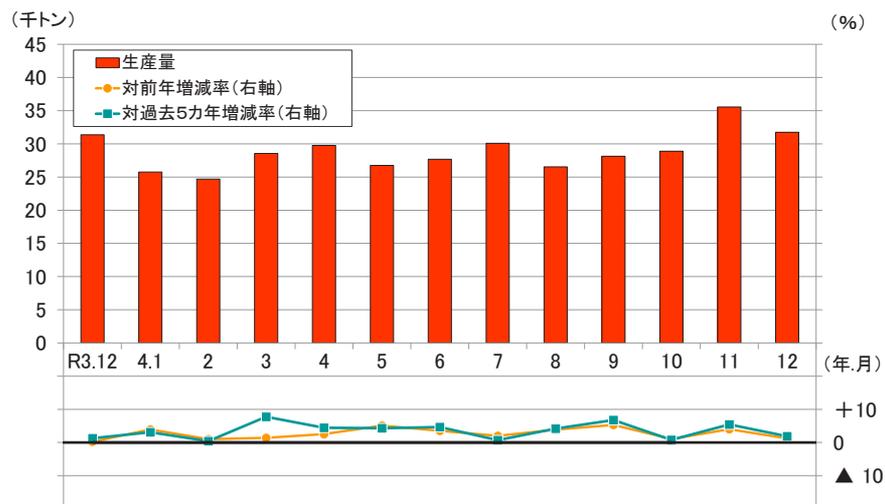
4年12月の牛肉生産量、前年同月比1.2%増

1 令和4年12月の牛肉生産量は、3万1744トン（前年同月比1.2%増）と前年同月をわずかに上回った（図1）。品種別では、和牛は1万5865トン（同0.1%減）と前年同月並み、乳用種は7032トン（同3.2%減）と前年同月をやや下回った一方、

交雑種は8422トン（同9.1%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

なお、過去5カ年の12月の平均生産量との比較では、1.9%増とわずかに上回る結果となった。

図1 牛肉生産量の推移



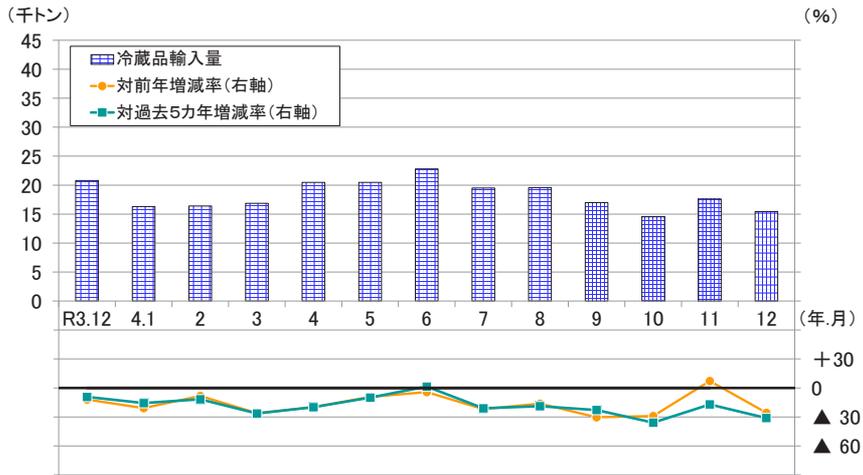
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2 12月の輸入量は、冷蔵品は、現地相場の高止まりや為替の影響などにより、豪州産、米国産などの主要国からの輸入量が例年より少なかったことから、1万5439トン（同25.7%減）と前年同月を大幅に下回った（図2）。また、冷凍品も、国内需要の低下に加え、入船遅れの影響などにより豪州産やカナダ産などが減少したことから、2万1977トン（同11.7%減）と前

年同月をかなり大きく下回った（図3）。この結果、全体では3万7456トン（同18.0%減）と前年同月を大幅に下回った。

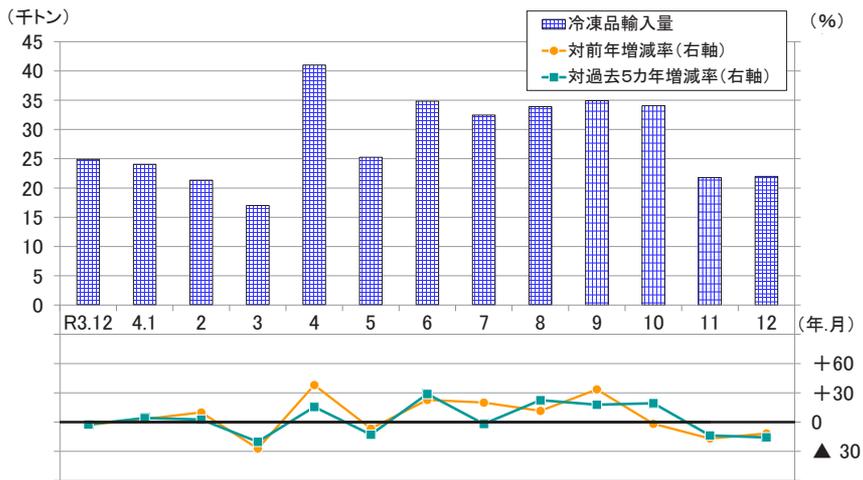
なお、過去5カ年の12月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は31.2%減と大幅に、冷凍品は15.7%減とかなり大きく、いずれも下回る結果となった。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

3 12月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）は225グラム（同9.1%減）と前年同月をかなりの程度下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の12月の平均消費量との比較では、10.7%減とかなりの程度下回る結果となった。

外食産業全体の売上高は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の新規感染者数が増加傾向だったものの、年末にかけて個人客や家族客の外食需要が増加したこ

とや価格改定などにより、前年同月と比べ8.6%増とかなりの程度上回った（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態では、ハンバーガー店を含むファーストフードの洋風は、クリスマス前後の季節商品の販売が好調であったことなどから、同13.2%増と前年同月をかなり大きく上回った。また、牛丼店を含むファーストフードの和風は、テレビコマーシャル効果や季節限定メニューが好調

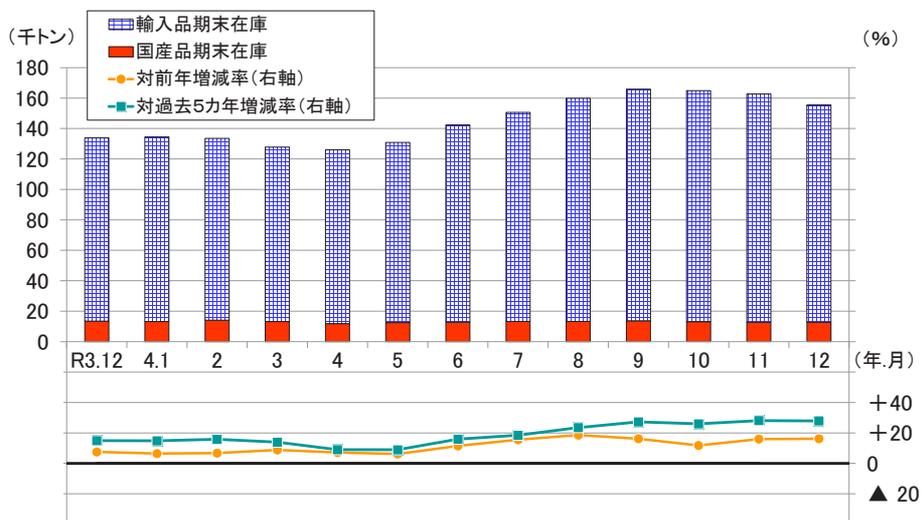
であったことなどから、同6.7%増と前年同月をかなりの程度上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、年末の家族客を中心とした需要により、同2.3%増と前年同月をわずかに上回った。

4 12月の推定期末在庫は、15万5566トン（同16.2%増）と前年同月を大幅に上回った（図4）。前月同月比で16カ月連続の増加となった。このうち、輸入品は14

万2876トン（同18.7%増）と前年同月を大幅に上回った。

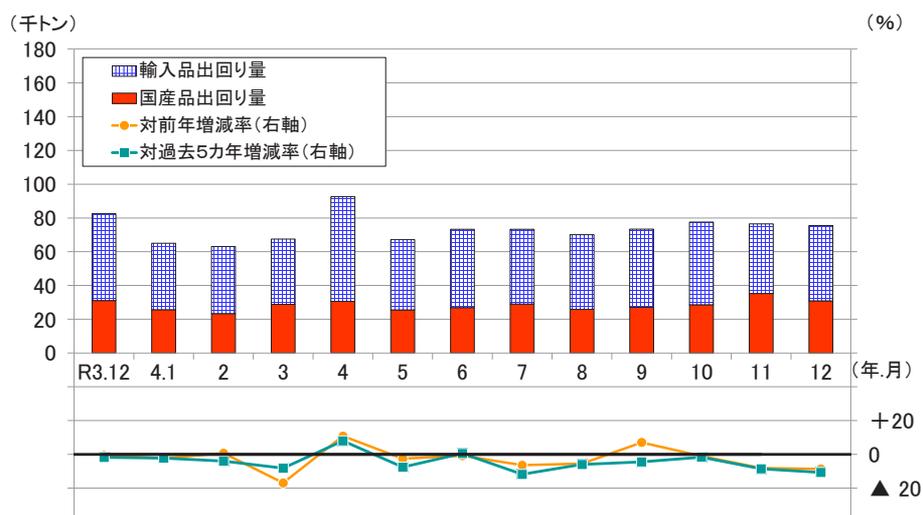
推定出回り量は、7万5470トン（同8.6%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図5）。このうち、国産品は3万875トン（同0.6%減）とわずかに、輸入品は4万4594トン（同13.4%減）とかなり大きく、いずれも前年同月を下回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 大内田 一弘)

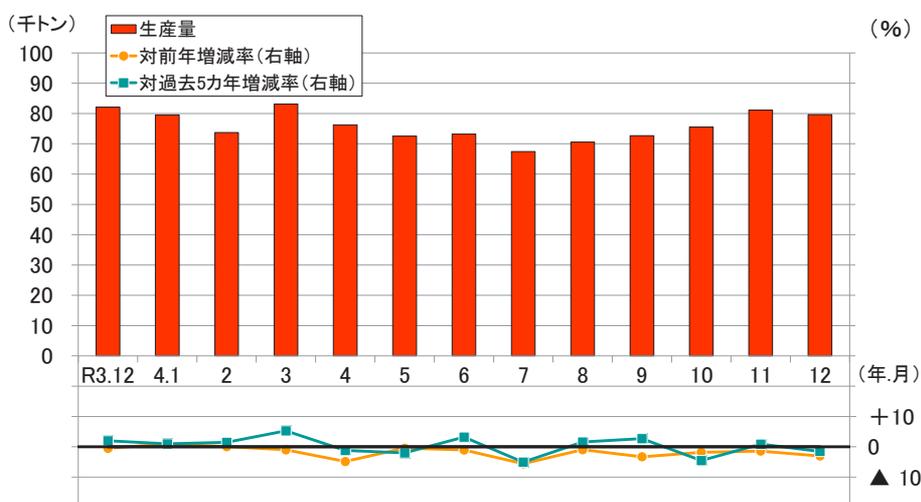
豚 肉

4年12月の豚肉生産量、前年同月比3.1%減

1 令和4年12月の豚肉生産量は、7万9634トン（前年同月比3.1%減）と前年同月をやや下回った（図1）。

なお、過去5カ年の12月の平均生産量との比較では、1.6%減とわずかに下回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



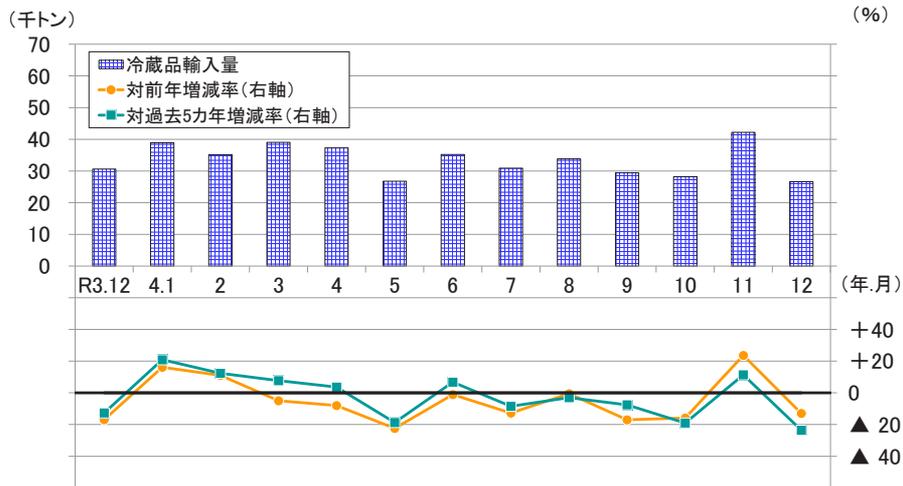
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2 12月の輸入量は、冷蔵品は、北米の現地相場の高止まりや入船遅れ、為替の影響などから、2万6616トン（同13.0%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図2）。また、冷凍品も、北米の現地相場の高止まりや為替の影響などから、4万2234トン（同3.7%減）と前年同月をやや下回った（図3）。この結果、全体では

6万8853トン（同7.5%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

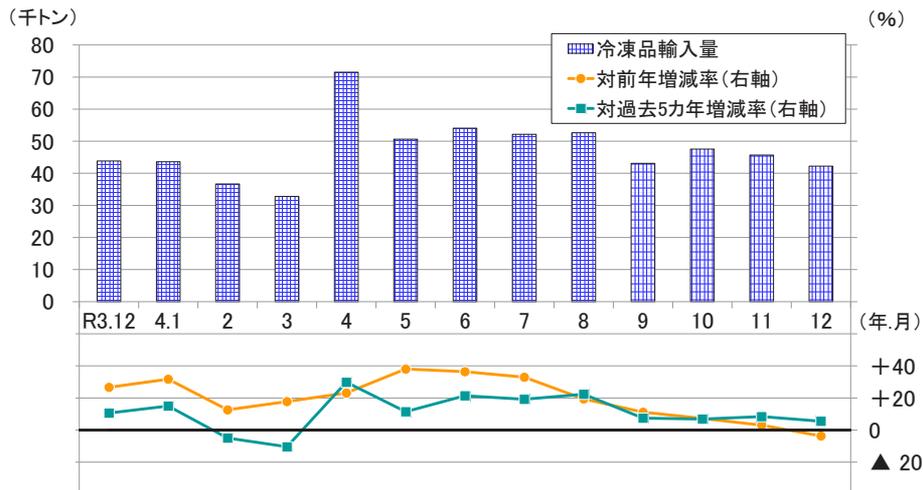
なお、過去5カ年の12月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は23.6%減と大幅に下回る一方、冷凍品は5.5%増とやや上回る結果となった。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

3 12月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）は、688グラム（同4.6%増）と前年同月比をやや上回った（総務省「家計調査」）。

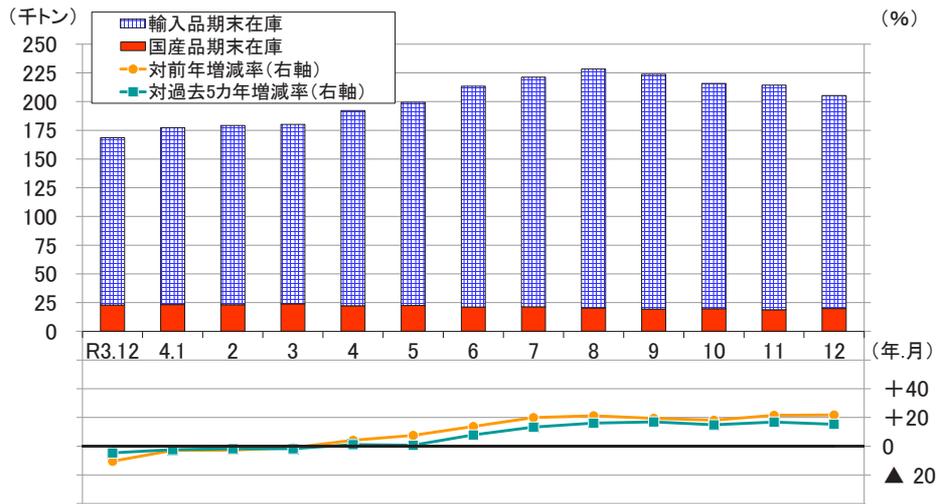
なお、過去5カ年の12月の平均消費量との比較では、4.2%増とやや上回る結果となった。

4 12月の推定期末在庫は、20万5299トン（同21.7%増）と前年同月を大幅に上回ったものの、同数量は4カ月連続で減少

した（図4）。このうち、輸入品は、18万5413トン（同27.3%増）と前年同月を大幅に上回った。

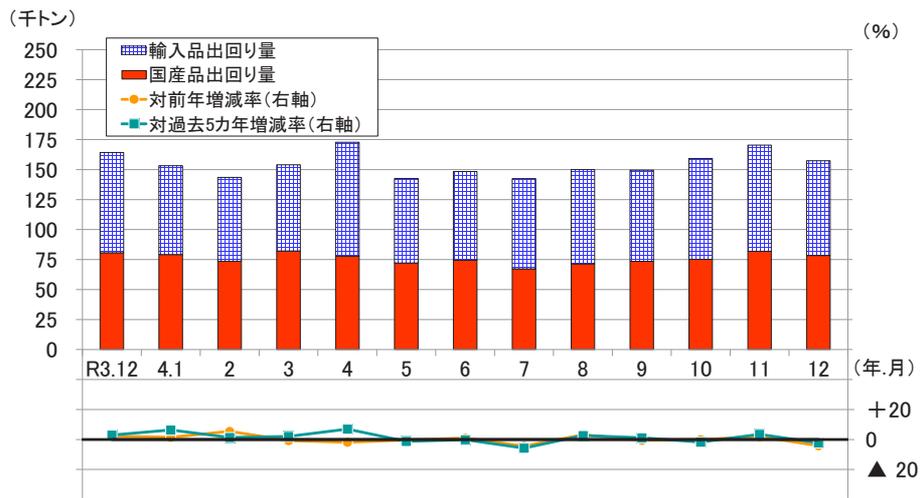
推定出回り量は15万7410トン（同4.1%減）と前年同月をやや下回った（図5）。このうち、国産品は7万8413トン（同2.8%減）とわずかに、輸入品は7万8996トン（同5.4%減）とやや、いずれも前年同月を下回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 田中 美宇)

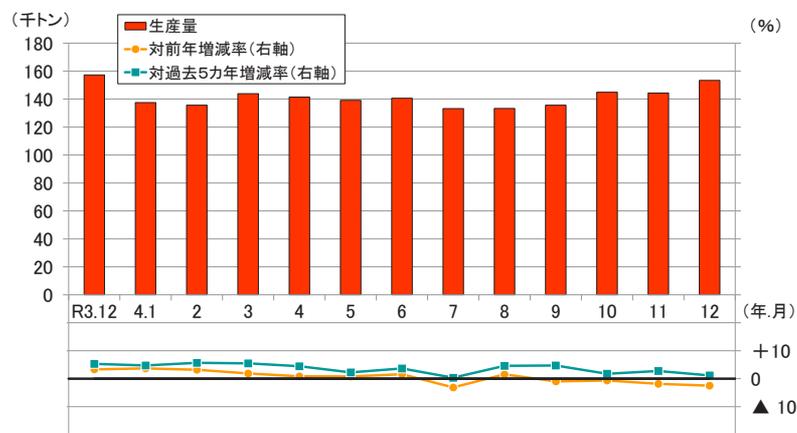
鶏肉

4年12月の鶏肉生産量、前年同月比2.5%減

1 令和4年12月の鶏肉生産量は、15万3393トン（前年同月比2.5%減）と前年同月をわずかに下回った（図1）。

なお、過去5カ年の12月の平均生産量との比較では、1.2%増とわずかに上回った。

図1 鶏肉生産量の推移



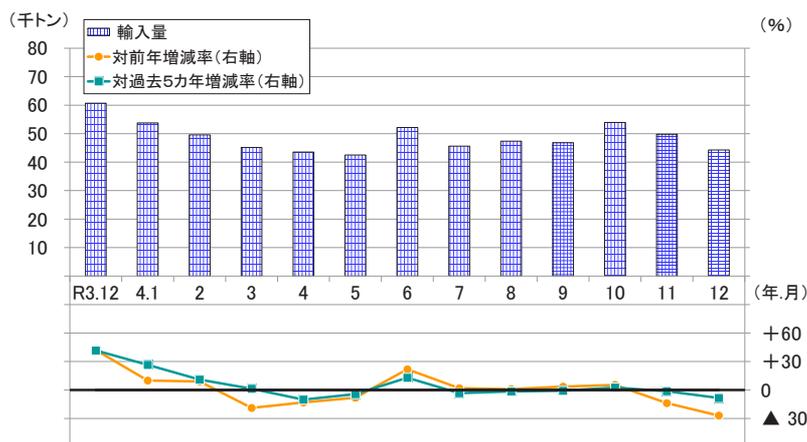
資料：農畜産業振興機構調べ
注1：骨付き肉ベース。
注2：成鶏肉を含む。

2 12月の輸入量は、前年同月のブラジル産の輸入量が、当時低水準であった国内在庫状況を受け2年12月比62.6%増と非常に多かったことの反動などから、4万4279トン（同27.0%減）と前年同月を大

幅に下回った（図2）。

なお、過去5カ年の12月の平均輸入量との比較でも、8.4%減とかなりの程度下回る結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

3 12月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）は、596グラム（同2.7%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

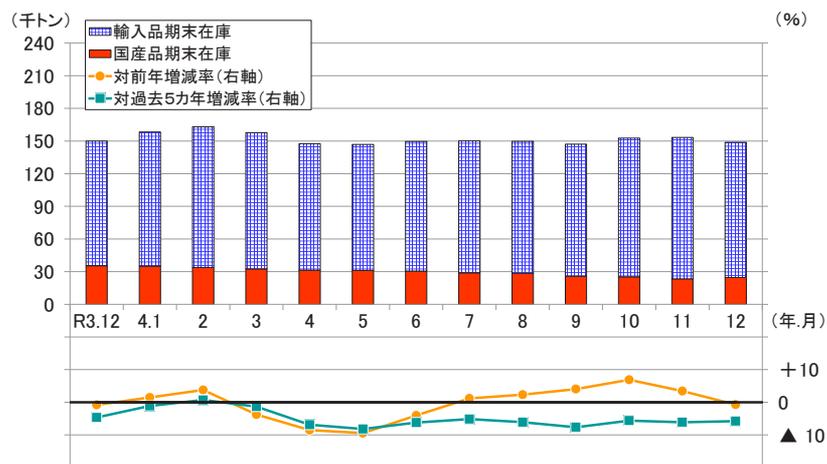
なお、過去5カ年の12月の平均消費量との比較でも、3.0%増とやや上回る結果となった。

4 12月の推定期末在庫は、14万8824トン（同0.7%減）と前年同月をわずかに下回った（図3）。このうち、輸入品は12万

4180トン（同8.5%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

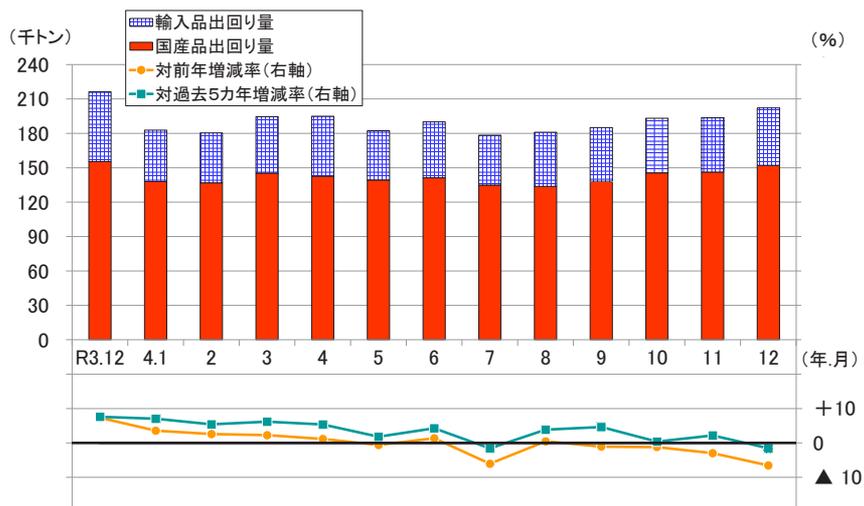
推定出回り量は、20万2160トン（同6.5%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図4）。このうち、国産品は15万2122トン（同2.1%減）とわずかに、輸入品は5万38トン（同17.9%減）と大幅に、いずれも前年同月を下回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 郡司 紗千代)

令和4年の牛および豚枝肉の格付結果

公益社団法人日本食肉格付協会は、令和4年(1月～12月)の「牛枝肉格付結果(品種別・性別)」および「豚枝肉格付結果」(令和5年1月20日版)を公表した。

牛枝肉の格付実施率は、成牛のと畜頭数

(108万3115頭)に対して84.2%と、前年から0.8ポイント減少した一方、豚枝肉の格付実施率は、と畜頭数(1657万9075頭)に対して77.3%と前年から0.5ポイント増加した。以下、畜種ごとの格付結果を紹介する。

【牛肉】「A-5」の格付頭数は3年連続で15等級の中で最多に

4年の牛のと畜頭数は108万3115頭と前年比3.0%増加した。品種別に見ると、和牛は49万147頭(同1.5%増)、交雑牛は24万8650頭(同8.6%増)、乳用牛は33万1121頭(同1.8%増)、外国種などを含むその他の牛は1万3197頭(同6.6%減)となった。

このような中、同年の牛枝肉の総格付頭数は、同年の成牛のと畜頭数が増加(前年比3.0%増)となったことから、91万1957頭(同2.0%増)と前年をわずかに上回った。品種別の格付頭数を見ると、「和牛」(47万1558.5頭)は前年比1.4%増、「交雑牛」(23万4664頭)は同8.5%増と前年を上回った一方、「乳用牛」(19万2099.5頭)は同3.1%減、「その他の牛」(1万3635頭)は同6.7%減と前年を下回った。

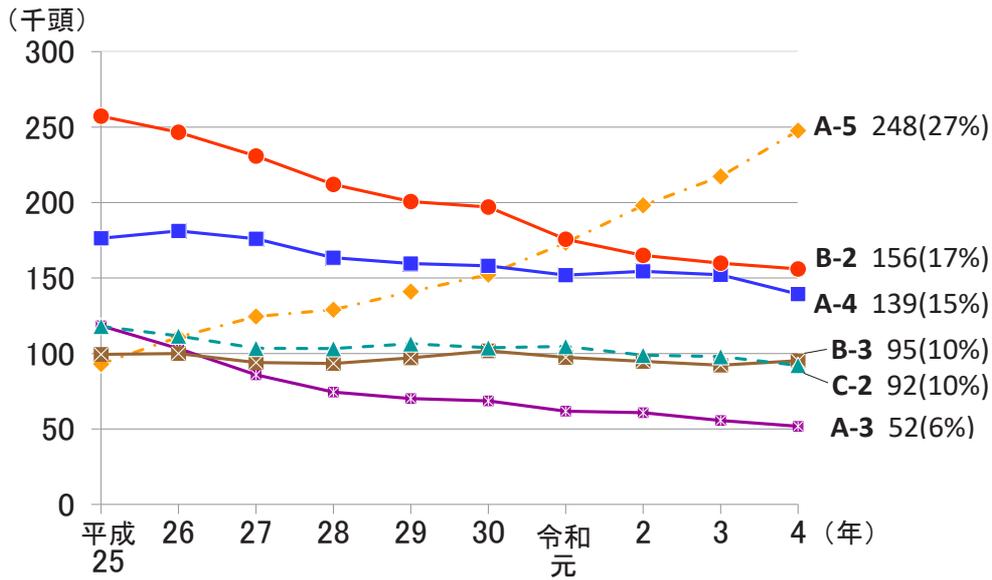
牛肉は、「歩留等級(A～C)」と「肉質等級(5～1)」を組み合わせた15段階で格付されている。歩留等級とは、枝肉から得られる部分肉の割合を評価し、部分肉歩留が標準より良いものはA、標準のものはB、標準より劣るものはCと判定される。また、肉質等

級とは、(1)脂肪交雑(サシ)(2)肉の色沢(3)肉の締まりおよびきめ(4)脂肪の色沢と質一の4項目を5段階で評価し、四つの項目中、最も低い等級が肉質等級として判定される。

4年の国産牛全体における等級ごとの格付頭数の推移を見ると、「A-5」が24万7628.5頭(前年比14.0%増)と前年をかなり大きく上回り、3年連続で15等級の中で最多となった。全体に占める割合は、27.2%となり、前年から2.9ポイント増加した(図1)。「A-5」の内訳をみると、和牛去勢が63.6%、和牛めすが35.2%と、和牛で約99%となっている。

「A-5」に次いで多い「B-2」は、平成25年をピークに減少が続いており、15万6014頭(前年比2.4%減)と前年をわずかに下回った。「B-2」のうち約5割を乳用牛去勢が占めており、乳用牛のと畜頭数の減少が「B-2」の格付頭数の減少の主な要因の一つとみられる。

図1 主要な等級別格付頭数の推移

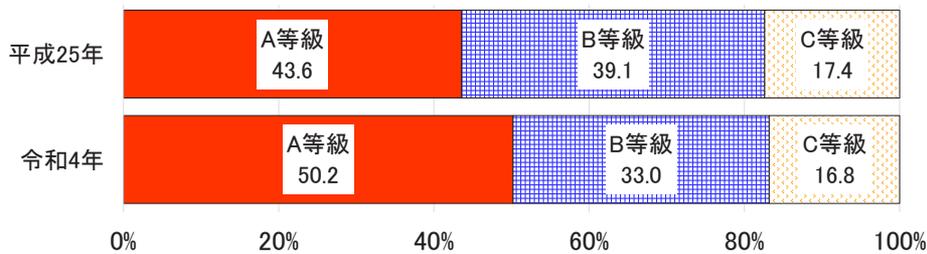


資料：(公社)日本食肉格付協会
注：カッコ内は構成比。

歩留等級別の格付構成比を見ると、全体に占める「A等級」の割合は50.2%と、平成25年と比較すると6.6ポイント増加した(図2)。また、肉質等級別の格付構成比を

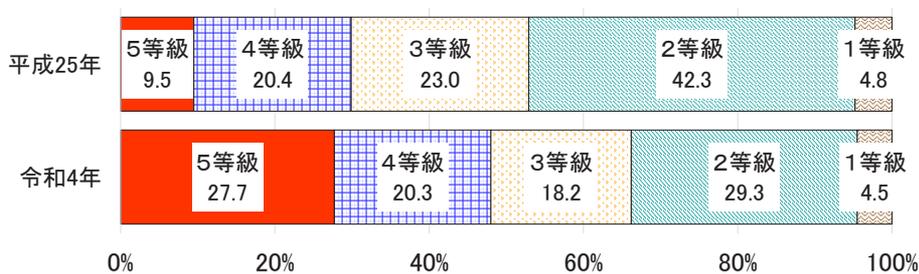
見ると、全体に占める「5等級」の割合は27.7%と25年から18.2ポイント増加した一方、「4等級」は25年から0.1ポイント減少の20.3%とほぼ横ばいとなった(図3)。

図2 歩留等級別の格付構成比の推移



資料：(公社)日本食肉格付協会
注：端数処理の関係から合計と内訳が一致しない。

図3 肉質等級別の格付構成比の推移



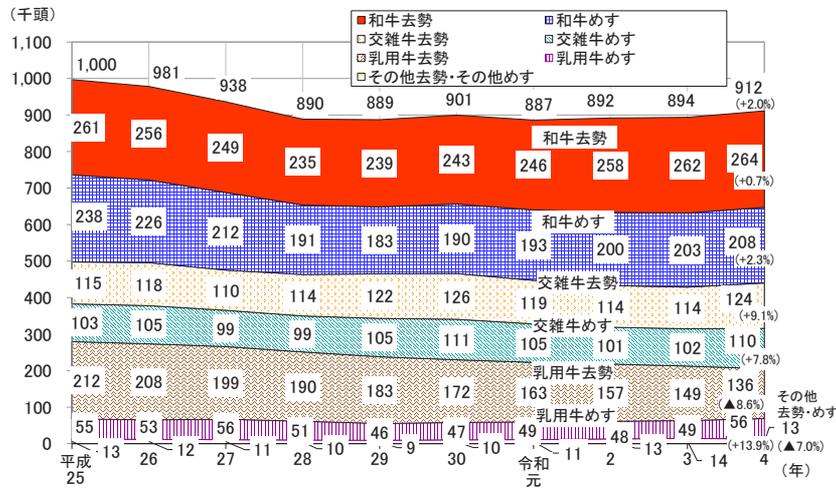
資料：(公社)日本食肉格付協会

品種別・性別の格付頭数を見ると、和牛去勢が26万3846.5頭（同0.7%増）と最も多く、次いで和牛めすが20万7527頭（同2.3%増）、乳用牛去勢が13万6454頭（同8.6%減）、交雑牛去勢が12万4452頭（同9.1%増）、交雑牛めすが11万194.5頭（同

7.8%増）となった（図4）。

なお、品種別の割合は、和牛が51.7%（同0.3ポイント減）、交雑牛が25.7%（同1.5ポイント増）、乳用牛が21.1%（同1.1ポイント減）、その他の牛が1.5%（同0.1ポイント減）となった。

図4 品種別・性別格付頭数の推移



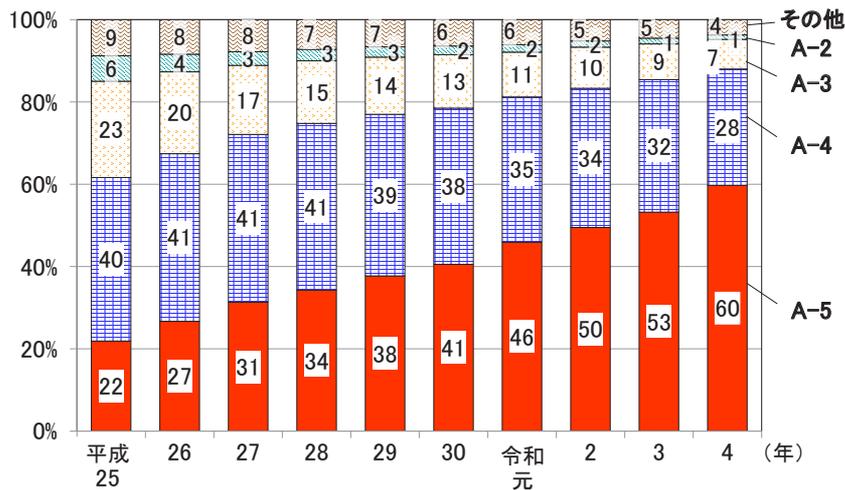
資料：(公社) 日本食肉格付協会
注：かっこ内は前年比。

4年の品種別・性別ごとの格付構成割合を見ると、和牛去勢は、「A-5」が59.7%と、前年から6.4ポイント増加した一方、「A-4」

は28.2%と同4.1ポイント、「A-3」は7.2%と同1.5ポイントそれぞれ減少した（図5）。

また、和牛去勢全体に占める「A等級」の

図5 牛枝肉格付構成割合の推移（和牛去勢）



資料：(公社) 日本食肉格付協会
注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない場合がある。

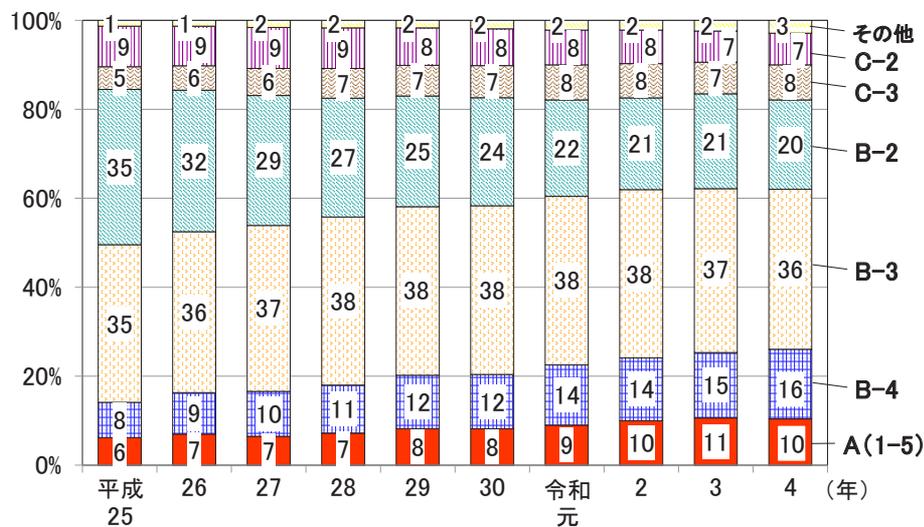
割合は、96.3%(同0.8ポイント増)となった。

交雑牛去勢は、「B-3」が最も多く、36.0%と前年から0.8ポイント、「B-2」も20.1%と同1.2ポイントそれぞれ減少した一

方、「B-4」は15.7%と同1.0ポイント増加した(図6)。

また、平成25年以降の推移から、より上位の格付結果が増加している傾向が見てとれる。

図6 牛枝肉格付構成割合の推移(交雑牛去勢)



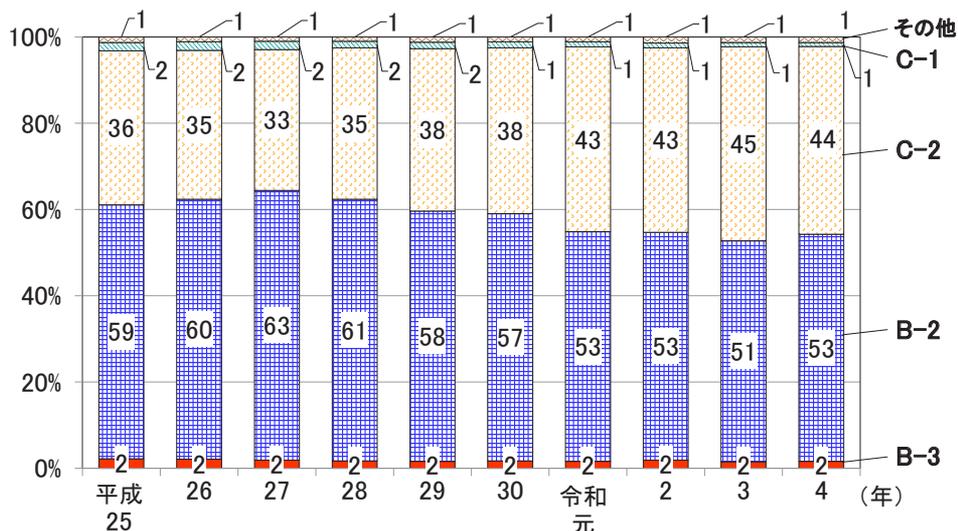
資料：(公社)日本食肉格付協会

注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない場合がある。

乳用牛去勢は、「B-2」が最も多く、52.6%と同1.4ポイント増加した一方、「C-2」は43.5%と同1.4ポイント減少した(図

7)。平成28年以降、「B-2」は減少傾向で推移しているのに対し、「C-2」は増加傾向で推移している。

図7 牛枝肉格付構成割合の推移(乳用牛去勢)



資料：(公社)日本食肉格付協会

注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない場合がある。

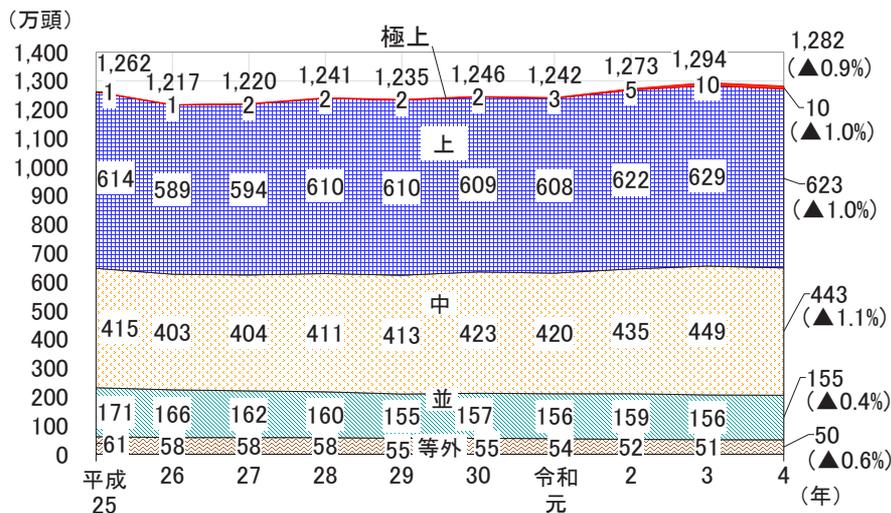
【豚肉】 4年の格付構成比、「上」が48.6%、「中」が34.6%

豚肉は、枝肉の重量および背脂肪の厚さ、外観（均称、肉づき、脂肪付着、仕上げ）、肉質（肉の締まりおよびきめ、肉の色沢、脂肪の色沢と質、脂肪の沈着）の基準に照らして、「極上」、「上」、「中」、「並」、「等外」の5等級に格付される。

4年の豚枝肉の総格付頭数は、1281万

7394頭（前年比0.9%減）と前年をわずかに下回った。等級別の格付頭数を見ると、「上」が622万9418頭（前年比1.0%減）と最も多く、次いで「中」が443万4715頭（同1.1%減）、「並」が155万993頭（同0.4%減）、「等外」が50万3607頭（同0.6%減）、「極上」は9万8661頭（同1.0%減）となった（図8）。

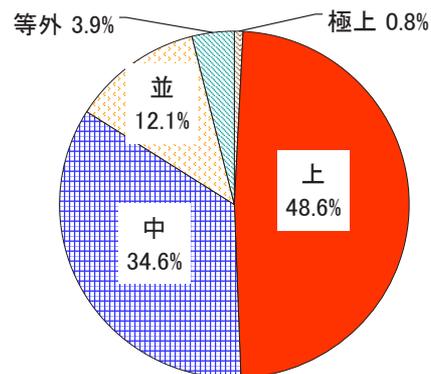
図8 豚枝肉等級別格付頭数の推移



資料：(公社) 日本食肉格付協会
注：かっこ内は前年比。

4年の等級別の格付構成比を見ると、「上」が48.6%（前年同）と最も多く、次いで「中」が34.6%（同0.1ポイント減）、「並」が12.1%（同0.1ポイント増）、「等外」が3.9%（前年同）、「極上」が0.8%（前年同）となり、構成比に大きな変化は見られなかった（図9）。

図9 等級別の格付構成比



資料：(公社) 日本食肉格付協会

(畜産振興部 大内田 一弘)

牛乳・乳製品

生乳生産量、2年連続前年割れの見込み

12月の生乳生産量、前年同月比3.8%減

令和4年12月の生乳生産量は、62万1061トン（前年同月比3.8%減）と前年同月をやや下回り、5カ月連続で前年同月を下回った（図1）。地域別に見ると、北海道は34万9533トン（同4.5%減）と前年同月をやや下回り、都府県は27万1528トン（同2.8%減）とわずかに下回った。北海道は4カ月、都府県は5カ月連続でそれぞれ前年同月を下回った。これは生産抑制などによるものとみられる。

図1 生乳生産量の推移



12月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは、30万9561トン（同2.0%減）と前年同月をわずかに下回った。このうち、業務用向けについては、2万7766トン（同5.0%増）と前年同月をやや上回った。

乳製品向けは、30万7621トン（同5.5%減）と前年同月をやや下回り、5カ月連続で前年同月を下回った。これを品目別に見ると、クリーム向けは、6万3753トン（同6.7%減）と前年同月をかなりの程度下回った一方で、

チーズ向けは、4万1078トン（同1.6%増）とわずかに上回った。脱脂粉乳・バター等向けは、16万2016トン（同7.4%減）と前年同月をかなりの程度下回った（独立行政法人農畜産業振興機構「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

12月の牛乳等の生産量を見ると、飲用牛乳等のうち、牛乳は24万8332キロリットル（同3.0%減）、成分調整牛乳は1万9484キロリットル（同5.4%減）とともに前年同月をやや下回った。加工乳は、1万3173キロリットル（同14.3%増）と前年同月をかなり大きく上回った。乳飲料は、7万9902キロリットル（同0.3%増）と前年同月並みとなり、はっ酵乳は、7万2473キロリットル（同6.6%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

乳製品向けのうち、クリームは1万1040トン（同5.8%減）と前年同月をやや下回った。

12月の脱脂粉乳生産量、前年同月比8.8%減

12月の脱脂粉乳の生産量は、1万4348トン（同8.8%減）と前年同月をかなりの程度下回る一方で（図2）、出回り量は1万7705トン（同55.1%増）と前年同月を大幅に上回った（農畜産業振興機構調べ）。12月末の在庫量は、8万2418トン（同12.9%減）と在庫解消対策などにより、7カ月連続で前月を下回り、3カ月連続で前年同月を下回った（図3）。

図2 脱脂粉乳の生産量の推移

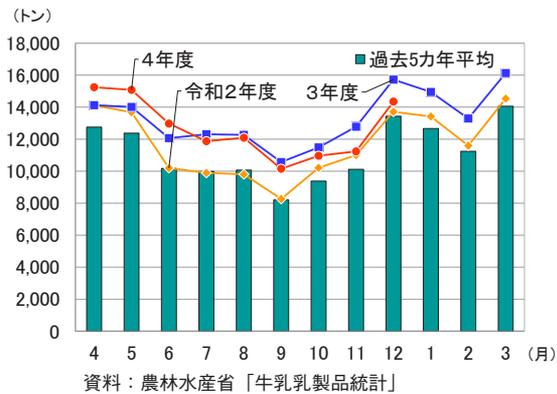


図4 バターの生産量の推移

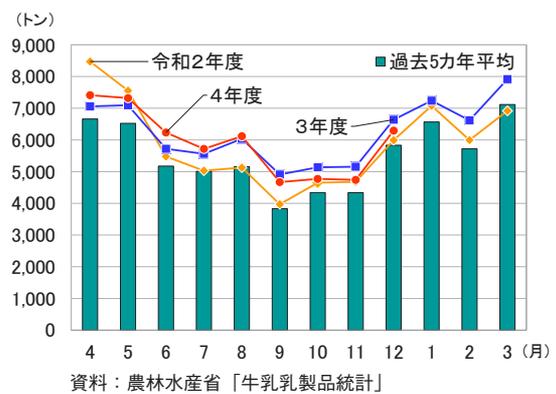


図3 脱脂粉乳の在庫量の推移

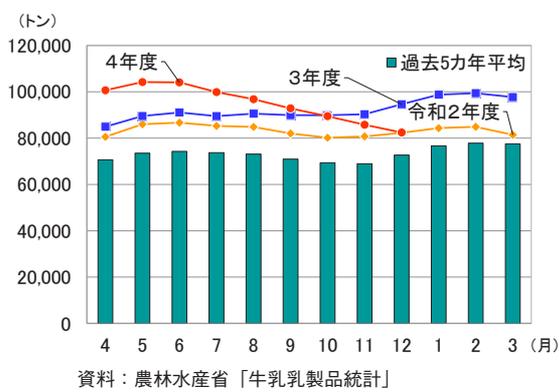
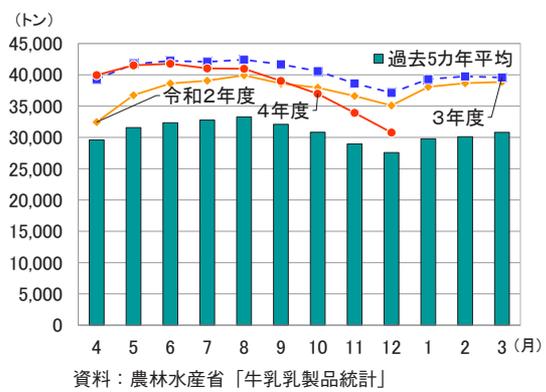


図5 バターの在庫量の推移



12月のバター生産量、4カ月連続前年同月割れ

12月のバターの生産量は、6292トン（同5.2%減）と前年同月をやや下回り、4カ月連続で前年同月を下回った（図4）。一方で出荷量は1万468トン（同12.9%増）と前年同月をかなり大きく上回った（農畜産業振興機構調べ）。12月末の在庫量は、3万774トン（同17.1%減）と前年同月を大幅に下回り、8カ月連続で前年同月を下回った（図5）。

生乳生産量、2年連続前年割れの見込み

一般社団法人Jミルクは、令和5年1月27日、「2023年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと課題」を公表した。これによると、5年度の生乳生産量は747万トン（前年度比1.3%減）と2年続けて前年を下回る見込みである（表）。地域別に見ると、北海道では423万トン（同1.0%減）、都府県では323万9000トン（同1.6%減）とともにわずかに減少する見込みとなっている。

表 生乳生産量の見通し

(単位：千トン、%)

	合計		北海道		都府県	
	生産量	前年度比 (増減率)	生産量	前年度比 (増減率)	生産量	前年度比 (増減率)
令和元年度	7,362	1.1	4,092	3.1	3,270	▲1.3
2年度	7,433	1.0	4,158	1.6	3,275	0.1
3年度	7,647	2.9	4,311	3.7	3,335	1.8
4年度 (見通し)	7,565	▲1.1	4,274	▲0.9	3,291	▲1.3
5年度 (見通し)	7,470	▲1.3	4,230	▲1.0	3,239	▲1.6

資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、一般社団法人Jミルク「2023年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと課題について」(令和5年1月27日公表)

注：令和元年度～3年度は実績値、4～5年度は見通しである。

5年度の輸入枠数量が決定

農林水産省は令和5年1月27日、5年度の指定乳製品等の輸入枠数量を決定した。これによると、5年度の輸入枠は、4年度と同様にWTOにおいて約束している最低数量（カレントアクセス:生乳換算で13万7000トン）にとどめることとした。品目別の輸入量（製

品重量）は、脱脂粉乳およびホエイについては、国際約束に従ってそれぞれ750トン、4500トン、バターオイルについては需要が見込める185トン、残りをバター8000トンに配分することとした。当機構は、今回設定された輸入枠数量に基づき、入札を実施する予定である。

(酪農乳業部 高橋 沙織)

鶏 卵

5年1月の鶏卵卸売価格、高水準での推移が続く

令和5年1月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、1キログラム当たり280円（前年同月差129円高）となり、前月の284円からは低下したものの、5カ月連続で前年同月を上回った（図1）。

例年、年末年始にかかる加工業者や量販店の休業などにより産地に滞留した鶏卵が年明けの営業再開に伴い一斉に流通するため、年初の鶏卵相場の始値は下落する。5年の始値も4年12月の終値（同300円）より40円安の同260円となったが、その後、再び上昇傾

向となり1月末の終値は同305円となった。

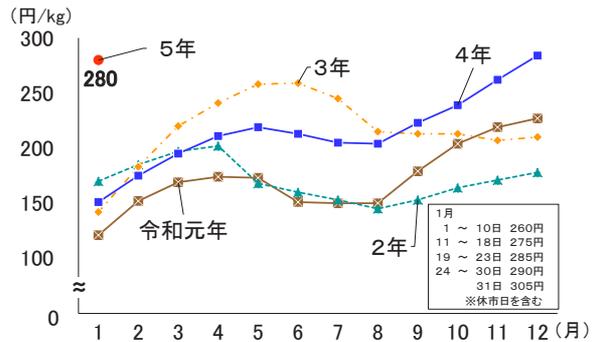
月平均価格の対前年同月比でも、11月は126.6%、12月は135.2%、1月は185.4%と高水準が続いている。また、過去5カ年の1月平均149円に対して、本年1月の卸売価格は131円高（+88.4%）となった。

昨年から引き続き、業務用需要が回復傾向にあることや、生産コストの上昇などから卸売価格が例年より高水準で続いていること、加えて年末の需要期や高病原性鳥インフルエ

ンザ（以下「HPAI」という）の発生などが重なった影響と見られる。

今後について、供給面では、全国的に発生しているHPAIの影響が懸念される。また、需要面は、全国旅行支援期間の延長や、寒さが落ち着き始め、人流の活発化などによる外食需要の回復が期待されることに加え、例年より高値での推移が続く中、これから価格上昇に向かうシーズンとなることから、今後の動向が注目される。

図1 鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」
注：消費税を含まない。

鶏卵小売価格、21カ月連続で前年同月を上回る

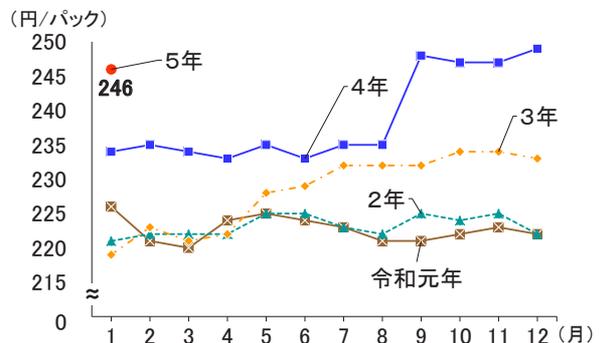
鶏卵の小売価格は、その消費量のほとんどが国内生産で賄われていることから、国産鶏卵の卸売価格の影響を受ける傾向がある。

鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、生産コストの上昇による価格転嫁などにより高水準で推移したまま年末の需要期を迎え、HPAIの影響も加わり、例年に比べて非常に高い水準で推移している。

小売価格（東京都区部）の推移を見ると、1月は1パック当たり246円（前年同月差12円高）となり、前月の同249円からは3円下げたものの、21カ月連続で前年同月を上回った（図2）。なお、過去5カ年の1月の平均価格と比べても19円高い水準となっており、高止まり傾向が続いている。

昨年からさまざまな商品の物価が値上がりし、消費者の節約志向がさらに高まることなどが予想される中、鶏卵の消費動向にもどのような影響が出るか注視する必要がある。

図2 鶏卵小売価格の推移



資料：総務省「小売物価統計調査」
注1：消費税を含む。
注2：サイズ混合（卵重「MS52グラム～L L76グラム未満」、「MS52グラム～L70グラム未満」または「M58グラム～L70グラム未満」）。

（畜産振興部 生駒 千賀子）